

目次	真宗総合研究所への期待	1
	2002年度「指定研究」研究組織一覧	2
	2002年度「一般研究」研究組織一覧	4
	2002年度「指定研究」研究目的紹介	5
	2002年度「一般研究」研究目的紹介	11
	北京蔵学セミナーに参加して	13
	第五回国際法華経学会に参加して	16
兼報	20	

研究所報

真宗総合研究所への期待

真宗総合学術センター長 木場明志

真宗総合研究所が学内に帰って来た。大学構内整備の都合上から学外移転を余儀なくされて11年ぶりのことである。しかも、単に帰って来たのではなく、真宗総合学術センター（響流館）を構成する一施設としてである。ここには、大きな意味がある。

真宗総合学術センターは、真宗総合研究所、学生・大学院生総合研究室、図書館、博物館、メディアホール、ギャラリーなどから構成される一大学術拠点である。これを構成する各施設は、有機的に連携して相互の成果を活用し、教育・研究の効果を高めるよう意図され収容・配置されている。すなわち、真宗総合研究所は単独で自己完結型の成果を目指すのではなく、他の施設にとっても有用な成果や研究情報を提供しなければならなくなった。今後は、独自の研究スタンスによる研究プロジェクトを進めるだけでは存在意義が問われるのである。

2002年度の真宗総合研究所の指定研究を例にとれば、①真宗学事研究 ②仏教文献研究 ③国際仏教研究の三つの大きな核になる研究が構想されている。①はさらに、a 清澤満之研究 b 真宗学事史研究 c 真宗教学研究、②は、a チベット語文献研究 b パーリ語文献研究 c 和漢文献研究、③は、a 国際真宗学研究 b 仏教・他宗教比較研究、によって成っている。他の一般研究も含めて、これらの諸研究は人間の学を求める視点から行わ

れ、真宗・仏教・宗教、あるいは日本・東洋・世界などの複眼的思考によって提示されていく性質のものである。そこに「真宗総合」と名をつけた本学研究所の姿勢があり、それは同名を冠した新設の学術センター全体の構想ともなって、より一層力強く、課題に応える確実な研究成果を生み出していくよう準備されてきた。真宗総合研究所は、そうした理念を現実化する根幹施設としての期待を担って学内に帰って来たのである。世界に学としての仏教を発信する情報基地となる真宗総合学術センターへの期待は、真宗総合研究所の飛躍に寄せられている期待ともうけとめねばならない。

従来からも、研究所への期待は常に大きかったように思う。仏教文献を扱い国際化を促し、あるいは教学を論じ学事を点検してきた。しかしながら、近時においては研究分野の細分化がもたらす弊害も指摘されて、必ずしも効率的・機能的でない部分もあったかもしれない。成果が着実に示されてこそその研究所であろうから、手直しは早晚必然であったのである。研究所での研究を担う教員への授業担当軽減など、実現しようとしてなし得ないままのことがらはまだまだ多い。それでも研究所への期待が大きいのは、教育に裂かれるエネルギーが増えている分、研究への渴望があるのだと思う。一人では成せない研究が、共同では達成できる喜びもある。若い研究者の育成という面も含めて、研究所の担う役割は大きい。

2002(平成14)年度「指定研究」研究組織一覧

研究班	研究名	研究課題及び研究組織
真宗学事研究 チーフ 神戸 和麿	清沢満之研究	研究課題 「清沢満之全集」の編纂と思想研究 研究員 神戸 和麿 (キャップ:教授・真宗学) 安富 信哉 (教授・真宗学) 延塚 知道 (教授・真宗学) 池上 哲司 (教授・哲学) 須藤 訓任 (教授・哲学) 沙加戸 弘 (教授・国文学) 友田 孝興 (教授・ドイツ文学) 加来 雄之 (助教授・真宗学) 一楽 真 (助教授・真宗学) 嘱託研究員 寺川 俊昭 (本学名誉教授) 小野 蓮明 (本学名誉教授) 久木 幸男 (横浜国立大学名誉教授) 今村 仁司 (東京経済大学教授) 清沢 聡之 (清沢満之自坊西方寺住職) 研究補助員 高木 淳善 (本学任期制助手) 中澤 明司 (本学大学院博士後期課程第3学年) 西本 祐撰 (本学大学院博士後期課程第2学年) 富岡 量秀 (本学大学院博士後期課程第1学年) 日野 圭悟 (本学大学院博士後期課程第1学年) 義盛 幸規 (本学大学院博士後期課程第1学年)
	真宗学事史研究	研究課題 真宗学事関係史料の整理と公開 研究員 安富 信哉 (キャップ:教授・真宗学) 東館 紹見 (専任講師・日本史学) 嘱託研究員 福島 栄寿 (真宗大谷派教学研究研究所研究員) 平野 寿則 (本学非常勤講師) 研究補助員 安藤 弥 (本学大学院博士後期課程第3学年) 上林 直子 (本学大学院博士後期課程第3学年)
	真宗教学研究	研究課題 七祖聖教の校訂・註釈 研究員 沙加戸 弘 (キャップ:教授・国文学) 大内 文雄 (教授・東洋史学) 藤嶽 明信 (助教授・真宗学) 三木 彰円 (短期大学部専任講師・真宗学) 嘱託研究員 山田 恵文 (短期大学部助手) 北城 伸子 (本学任期制助手) 高木 淳善 (本学任期制助手) 研究補助員 本明 義樹 (本学大学院博士後期課程第3学年) 伊久留 睦 (本学大学院博士後期課程第1学年)
国際仏教研究 チーフ Robert F. Rhodes	国際真宗学研究	研究課題 近代教学思想研究 研究員 Robert F. Rhodes (キャップ:助教授・仏教学) 安富 信哉 (教授・真宗学) 渡辺 啓真 (助教授・倫理学) 木越 康 (短期大学部助教授・真宗学) 嘱託研究員 羽田 信生 (毎田周一センター所長) Jan Van Bragt (南山大学名誉教授) Mark L. Blum (ニューヨーク州立大学助教授) Paul Watt (デポー大学教授) 研究補助員 伊東 恵深 (本学大学院博士後期課程第2学年)
	仏教・他宗教比較研究	研究課題 仏教とキリスト教の比較研究並びに「教行信証」の独訳 研究員 門脇 健 (キャップ:教授・宗教学) 宮下 晴輝 (教授・仏教学) 友田 孝興 (教授・ドイツ文学) Albrecht Decke-Cornill (教授・ドイツ文学) 木越 康 (短期大学部助教授・真宗学) 村山 保史 (専任講師・哲学) 吉田 孝夫 (専任講師・ドイツ文学) 嘱託研究員 寺川 俊昭 (本学名誉教授) 箕浦 恵了 (本学名誉教授) 大河内了義 (本学名誉教授) 研究補助員 岡本 敦之 (本学大学院博士後期課程第2学年)

研究班	研究名	研究課題及び研究組織	
仏教文献研究 チーフ 木村 宣彰	西藏語文献研究	研究課題 研究員	北京版西藏大蔵経総目録のデジタル化 兵藤 一夫 (キャップ:教授・仏教学) 白館 戒雲 (教授・仏教学) 福田 洋一 (助教授・仏教学) 三宅伸一郎 (本学非常勤講師) Steven Hartwell (プログラマー)
		嘱託研究員	中島小乃美 (本学大学院博士後期課程第2学年) 井内 真帆 (本学大学院博士後期課程第1学年)
		研究補助員	
	バリ語文献研究	研究課題 研究員	大谷大学所蔵貝葉写本 Pannasajataka の校訂・翻訳 吉元 信行 (キャップ:教授・仏教学) 荒牧 典俊 (教授・仏教学) 山本 和彦 (専任講師・仏教学)
		嘱託研究員	長崎 法潤 (本学名誉教授) 田辺 和子 (東方研究会研究員) 畷部 俊也 (日本学術振興会特別研究員)
		研究補助員	舟橋 智哉 (本学大学院博士後期課程満期退学) 清水 洋平 (本学大学院博士後期課程第3学年)
	和漢文献研究	研究課題 研究員	大谷大学所蔵稀観典籍の調査と公開 木村 宣彰 (キャップ:教授・仏教学) 一色 順心 (短期大学部教授・仏教学) 織田 顕祐 (助教授・仏教学・研究所主事) 木場 明志 (教授・日本史学) 大内 文雄 (教授・東洋史学) 草野 顕之 (教授・日本史学) 沙加戸 弘 (教授・国文学) 宮崎 健司 (短期大学部助教授・日本史学)
		嘱託研究員	小林 芳規 (徳島文理大学教授) 梶浦 晋 (京大大学人文科学研究所助手) 采翠 晃 (本学非常勤講師) 藤島 建樹 (本学名誉教授) 赤尾 栄慶 (京都国立博物館主任研究員) 和田 光生 (大津市立歴史博物館学芸員) 堅田 理 (本学非常勤講師)
		研究補助員	藤谷 昌紀 (本学大学院博士後期課程第3学年) 加藤 基樹 (本学大学院博士後期課程第2学年) 鈴木 善幸 (本学大学院博士後期課程第1学年)
現代思想研究 チーフ 並木 治	大谷大学FD研究	研究課題 研究員	大谷大学におけるFDの基礎構築 並木 治 (キャップ:教授・フランス文学) 村瀬 順子 (教授・英文学) 藤嶽 明信 (助教授・真宗学) Robert F. Rhodes (助教授・仏教学) 織田 顕祐 (助教授・仏教学) 高井 康弘 (助教授・文化人類学) Didier Wester (助教授・フランス語教育) 浦山あゆみ (助教授・中国文学) 浅若 裕彦 (助教授・英文学) 山本 和彦 (専任講師・仏教学) 村山 保史 (専任講師・哲学) 田中 裕喜 (短期大学部専任講師・教育学) 谷口奈青理 (専任講師・臨床心理学) 東館 紹見 (専任講師・日本史学) 芦津かおり (専任講師・英文学) 吉田 孝夫 (専任講師・ドイツ文学) 中村 博幸 (京都文教大学人間学部助教授) Judith R. Ilett (前ランカスター大学英語教育機関チェアター・コーディネーター)
	大谷大学DB研究	研究課題 研究員	大谷大学におけるDBの基礎構築 草野 顕之 (キャップ:教授・日本史学) 片岡 裕 (教授・情報工学) 松川 節 (専任講師・人文情報学) 山本 貴子 (専任講師・図書館情報学) 柴田みゆき (短期大学部専任講師・コミュニケーション論)
		嘱託研究員	赤尾 栄慶 (京都国立博物館主任研究員・博物館学) 箕浦 暁雄 (本学任期制助手)
		研究補助員	有松 志保 (本学大学院博士後期課程第1学年)

2002(平成14)年度「一般研究」組織一覧

(A) 共同研究

研究代表者	研究課題及び研究組織	補助金
一色 順心	研究課題 「『十門弁惑論』の研究」 研究員 一色 順心(短期大学部教授・仏教学) 大内 文雄(教授・東洋史学) 織田 顕祐(助教授・仏教学)	190万円

(B) 個人研究

研究代表者	研究課題及び研究組織	補助金
浅若 裕彦	研究課題 「ジェイン・オースティンの文体論的研究」 研究員 浅若 裕彦(助教授・英文学)	90万円

2002(平成14)年度「指定研究」研究目的紹介

真宗学事研究

清沢満之研究

—『清沢満之全集』の 編纂と思想研究—

キャップ・教授 神戸 和麿
(真宗学)

本学は昨年、近代化100周年を迎えた。また本2002年には学祖である清沢満之の100回忌を迎える。これを機縁として、本研究では、新たな編集のもとに『清沢満之全集』を刊行することを目的とする。

清沢の全集はこれまでも3回にわたって刊行されている。すなわち、『清沢満之全集』3巻(無我山房刊)、『清沢満之全集』6巻(有光社刊)、『清沢満之全集』8巻(法蔵館刊)である。これらの全集はそれぞれ大切な役割を果たしてきたが、最も近刊のものでも既に40年余りを過ぎている。その後、新資料も見つかっており、清沢研究の基礎資料として新たな全集が求められている状況がある。と同時に、清沢の仕事が有する意義を今改めて世に問うことが重要であるという観点に立って、新たな全集の公刊を目指すものである。

今回の全集は清沢の著作をテーマ別に分け、全9巻をもって構成した。すなわち、第1巻宗教哲学、第2巻他力門哲学、第3巻哲学論集、第4巻哲学史研究、第5巻西洋哲学史講義、第6巻精神主義、第7巻仏教の革新、第8巻信念の歩み一日記一、第9巻信念の交流—書簡一、である。これによって清沢の思想的課題がより明確となることを目指している。

また編集にあたっては、清沢の自筆原稿があるものについては自筆原稿を依拠本とし、出版されたものについては初出掲載を依拠本として校訂作業を進めていく。校訂の基本方針としては、依拠本に忠実であることを原則とし、編集者の見解は注に示すこととした。また、各巻には文献ごとの解題と編集担当責任者による解説を付すことにしている。

刊行の具体的日程は、6月末には本文の原稿を揃えて入稿し、11月中旬を第1回配本、以後毎月1巻のペースで順次刊行していく予定である。尚、全集の編集作業の上で、自筆資料などの調査および収集も、これまでに引き続き行っていく予定である。

真宗学事研究

真宗学事史研究

—真宗学事関係史料の 整理と公開—

キャップ・教授 安富 信哉
(真宗学)

本研究所における真宗学事史の研究は、1981年の研究所開設と同時に、「近代における真宗の展開」を明らかにすることを研究目的とし、「真宗総合研究」として発足した。その後、研究の名称は、「真宗学事研究」「大学史編纂研究」及び「大谷大学近代史研究」と、時々直に直面した緊要の課題に即し変化してきた。しかし、それらの研究の底流に、真宗の学事三百余年の歩みを近世・近代史の中で適確に位置づけ、本学における学の方向性の指標を得んとする研究目的が、一貫して保持されていたことはいうまでもない。

昨年度、大谷大学近代化100周年を期として『大谷大学百年史』が公刊された現在、本「真宗学事史研究」班が、これまでの研究目的を継承しつつ取り組むべき課題としては、以下の諸点が挙げられる。

まず、早急に着手すべき課題として、『百年史』公刊に付随するものがある。『百年史』編纂の過程においては、多くの方々から貴重な資料や情報・意見が寄せられた。中でも、当該期の卒業生の方々に記入をお願いし、叙述に用いられた「『学徒出陣』および『勤労報国』に関するアンケート」は、それ自体資料として世に問うべき重要な内容を多く含んでいる。これを、『百年史』資料編の付録として、できるだけ早い時期に公刊したい。

同時に、中長期的な展望に立って取り組むべき課題としては、学事史研究の開始以来の研究目的を達成するため、三百余年の歩みを貫く問題点を整理・検討するという点がある。そのための基礎作業として、今年度は、蓄積された収集資料全般の確実な整理と内容の検討を行いたい。さらに、資料の収集・整理と保存・公開のあり方そのものについても検討すべきであろう。

また、「関根仁応日記」の研究についても視野に入れて、今年度は、準備をすすめたい。

以上、これまでの真宗学事史研究における研究目的を

継承し発展させてゆくために、今年度、本研究班として取り組むべき諸課題を略記した。我々が、「真宗学事史」の研究成果を、学の方向性の指標として共有してゆこうとするならば、歴史的事実の確定に向けての基礎資料の収集・整理と、歴史観の検討が必要である。それらは、諸学の「総合」によって、今後も着実かつ誠実に継続されてゆくべきであろう。「真宗学事史研究」が、そうした成果の蓄積と公開を保証する場となることを願い、その実現に向けての準備をすすめてゆきたい。

真宗学事研究

真宗教学研究

—七祖聖教の校訂・註釈—

キャップ・教授 沙加戸 弘
(国文学)

本研究は、浄土真宗を研究する上で不可欠とされる文献の研究、ことに七祖聖教の公開に向けての資料収集と文献研究を行うことを目的とする。また、これと併行して、真宗における「聖教」「聖典」とは何かということについても、さまざまな角度から検討を行うことを課題とするものである。

昨年度までの研究においては、親鸞の「加點本」を底本として善導の『観経四帖疏』をとりあげてきた。その本文の翻刻、註の抽出と整理、ならびに読み下し文の作成を行い、その全体にわたっておおむねその作業を終えている。昨年度はそのなかの特に『観経玄義分』に作業を集中し、テキストの刊行公開を念頭に置いて、翻刻・註・読み下し文の確認を主たる課題として作業を進めてきた。

これらの作業は、何よりもまず聖教編纂の具体的な作業手法の模索と確立という点に主眼を置いて積み重ねてきたものである。これによって、編纂作業に不可欠とされる基本資料は一応調えることができた。しかしそのなかで改めて課題として浮かび上がってきたのが、テキストの公開がいったい何を目的とするものであるのかということである。いわば作業の根本方針を明確にする必要が、改めて浮上してきたのである。

その反省を踏まえて、本年度は研究の対象を、親鸞「加點本」『観経玄義分』に集中し研究を進めていく。親鸞

がそれをどう読み取り受容しているのか、これまでの研究の成果に加えて、真宗学、仏教学からの視点はもとより、さらには国語学、書誌学、漢語学等、より広い角度から詳細な検討を加え、その厳密な翻刻公開にむけた作業を行っていく予定である。

加えて、これまで大谷大学、真宗大谷派においてさまざまなかたちでなされてきた聖教の刊行が、どのような方針のもとになされてきたのかという点にも着目しながら、本研究班の研究方針を明確にしていきたい。

国際仏教研究

国際真宗学研究

—近代教学思想研究—

キャップ・助教授 Robert F. Rhodes
(仏教学)

本研究班は、仏教研究を中心とした学術交流の推進を目的とするものである。近年、国際社会において仏教、特に真宗への関心が高まっている。そのような中、親鸞の思想を他の言語に翻訳した上で紹介していくことは、国際レベルでの仏教研究にとってきわめて重要な意味を持つものと思われる。したがって、当研究班・国際真宗学研究プロジェクトでは、真宗の代表的近代教学者の著作・論文数点を英訳し、その成果を国際社会に公表していく作業に取り組んできた。

2001年度までに、真宗を代表する4人の近代教学者(清沢満之・曾我量深・金子大栄・安田理深)の重要と思われる論文の英訳をほぼ完了した。今年度はこの成果を海外出版社より発表することを目的とし、さらに作業を進めることとする。特に海外に4人の論文を公表するに際しては、親鸞の思想研究において「近代教学」が持つ積極的意味を理解してもらう必要があるものと考えられる。したがってまずは、真宗(大谷派)における「近代教学」について、国際的視野の中からその意味を検証し、出版に際してのあらたな原稿を作成する作業から着手する。

また、以上の作業によって得た成果をもとにして、翻訳者を中心とした国際シンポジウムの開催を計画しているが、その実現のための準備研究も行っていきたい。

尚、次年度以降は特に清沢満之の著作の英訳を集中的に継続していく計画であるが、どの書物から英訳を行う

かを検討したうえで、具体的に翻訳作業に移ることにする。

国際仏教研究

仏教・他宗教比較研究

—仏教とキリスト教の比較研究 ならびに『教行信証』の独訳—

キャップ・教授 門脇 健
(宗教学)

近年国際社会では、仏教における浄土教、とりわけ親鸞の思想への関心が高まりつつある。このような状況を受けて、浄土真宗を中心とする仏教が国際社会の中でもちうる意味を、キリスト教を中心とする他宗教との比較を通じて把握することが本研究の目的である。

このような目的を果たすためには、浄土真宗とキリスト教における国際的な交流作業が不可欠であろう。具体的には、①従来必ずしも十分とは言えなかった、親鸞の諸著作のヨーロッパ語への翻訳作業、②研究者の緊密な相互交流、あるいはそうした相互交流の場の積極的な提供が必要となろう。

これまでの活動について言えば、①に関しては、『唯信鈔文意』(Yuishinshō-Mon'i [Erläuterungen zu Yuishinsho], Otani Universität, 1999) に引き続き、2001年度から、親鸞の主著である『教行信証』をドイツ語に翻訳する作業に着手し、三つの序の翻訳をほぼ終えた。②に関しては、1999年5月にドイツのマールブルク大学において開催された「第三回ルドルフ・オットー・シンポジウム」において、浄土真宗と福音主義神学を中心とする諸研究者によるシンポジウムを行い、シンポジウムの記録は、ドイツと日本において、それぞれ、*Buddhismus und Christentum—Jodo Shinshu und Evangelische Theologie—* (EB-Verlag, 2000)、『仏教とキリスト教の対話—浄土真宗と福音主義神学—』(法蔵館、2000年)として公表された。またこのシンポジウムを受け、2000年度には、マールブルク大学からミヒヤエル・パイ、ハンス＝マルチン・パールト、ゲルハルト・マルセル・マルチンといった三名の福音主義神学、宗教学の研究者を大谷大学へ招き、研究会を重ねた。

さらに今後の活動計画について言えば、①に関しては、『教行信証』の三つの序のドイツ語訳を公表するとともに、

引き続き、教巻の翻訳に着手する。②に関しては、上述の大谷大学における研究会の記録をまとめ、公表したい。また、国際的な学術会議への研究員の派遣を積極的に行い、とりわけ浄土真宗と福音主義神学の交流についてはこれを継続発展するため、三度目の対話として2003年5月にマールブルク大学で予定されているシンポジウム「仏教とキリスト教への挑戦としての世俗化」の開催に向けて、研究者を招くこと等も含め、さまざまな角度から準備作業を始めたい。

仏教文献研究

西藏語文献研究

—北京版西藏大蔵経総目録 のデジタル化—

キャップ・教授 兵藤 一夫
(仏教学)

本研究課題は、本学所蔵の西藏語文献を整理・研究するとともに、貴重な文献を内外に紹介することを目的としている。今年度はこの研究目的を実現すべく、次の諸項目の研究計画を立てている。

1. 本学所蔵北京版西藏大蔵経総目録のうち、昨年度までにチベット語、サンスクリット語のタイトル、帙番号、folio番号、行番号、他版の参照番号などについてのデータベース入力を終了した。今年度は、これら既入力データの校正を行い、秋までにインターネット上で公開できるようにする。
2. 北京版西藏大蔵経総目録データベースに、著者名、翻訳者名、校訂者名を入力する。タイトルと異なり、著者名などは同定が難しいので、研究員の協議のもとに一定の方針を定め、混乱のないように努める。
3. 当研究班で開発したMacintosh上でのチベット語入力システムである“Tibetan Language Kit for Macintosh”を、Mac OSの現在の最新バージョンであるMac OS Xに対応させるための開発作業、問題点の洗い出し、最終パッケージングを行う。年度内に配布開始の予定。
4. 本学にしか残されていない貴重なチベット語文献を調査して目録リストを作成する。さらに必要に応じて写真撮影やコンピュータ入力を行ない、広く学界にデータを公開する。既入力データのについては、

早急にインターネット上で公開すべく、データ処理を行なう。

仏教文献研究

パーリ語文献研究

一大谷大学所蔵貝葉写本 Paññāsajātaka の文献的研究—

キャップ・教授 吉元 信行
(仏教学)

本研究は、大谷大学図書館に蔵されている東南アジア地域所伝の膨大な南方仏教貝葉写本（大谷貝葉）の中で、特に稀観写本と思われる一連の『パンニャーサ・ジャータカ』（50のジャータカ）と言われるタイ所伝のパーリ語文献群の体系的、文献的研究である。

この『パンニャーサ・ジャータカ』のうち、大谷貝葉には26種類のジャータカが収められているが、すでに本研究共同研究と文部省科研によって、そのうちの9ジャータカをローマナイズし、田辺和子博士将来のバンコク国立図書館所蔵のマイクロフィルムと照合することによって、その Transliteration をほぼ完成し、一部のジャータカの翻訳も実施することができた。本研究はその継続研究として、研究員、嘱託研究員、研究補助員及び内外の研究者の協力を得て、残りのジャータカの Transliteration 完成させようとするものである。

昨年度は、まだ着手していなかった17ジャータカのうち、7ジャータカの Transliteration を実施し、本研究に関連する文献の翻訳研究を完成した。本年度は、残りの10ジャータカの Transliteration を実施することによって、本学図書館所蔵の『パンニャーサ・ジャータカ』の全貌を明らかにしようとするものである。

また、この作業に併せて、若干のジャータカの翻訳と、厳密な校訂作業も実施しており、本研究は次の段階での本ジャータカの校訂と翻訳の出版を目指している。このことが実現すれば、まだ学界に公開されていないタイ所伝の『パンニャーサ・ジャータカ』の紹介という意味で、学界に益すること計り知れないものがある。

仏教文献研究

和漢文献研究

一大谷大学所蔵稀観典籍の 調査と公開—

キャップ・教授 木村 宣彰
(仏教学)

本学は、寛文5年（1665）の学寮創設より、一貫して仏教研究とその公開を使命としてきた。そして、その長い歴史を通して、仏教を中心とした多くの典籍が収集され、所蔵する和漢文献は膨大な量にわたっている。本研究は、本学所蔵の稀観典籍の調査を行い、その中のとくに重要なものを選定して公開することを目的とする。そのことによって、広く世界の学界に貢献しようとするものである。また、2001年竣工した真宗総合学術センター（響流館）には、既存の図書館に併せて博物館が新設されるため、両館の資料の収蔵方針をも検討課題とした。これに加えて、前身の「大蔵経学術用語研究」が担ってきた対外的な役割も、これまでの経過をふまえながら、継続的に引き継いでいくこととする。

本研究の目的は、凡そ次の3点にまとめることができる。(1)本学所蔵の漢文仏教典籍のテキスト研究を行う。(2)本学所蔵の和漢典籍の中から善本を選定し刊行公開する。(3)本学所蔵の典籍および典籍以外のものの中から博物館に供し得る資料を調査し選定する。これらの目的を達成させるために、研究組織を、(1)(2)に携わる漢文仏教文献部門と(2)(3)を行う和漢文化財部門とに分けて、二つの研究部門が並行して研究を行うこととなる。また、(2)の場合のように、両部門に共通する課題については全体で作業を行っていくことが必要であり、適宜に全体会を開いていく予定である。

本学が所蔵する和漢文献の中には相当数の稀観典籍が含まれているが、具体的にどのようなものから公開すべきかという点に関して、不分明な状況にあるといわざるをえない。

漢文仏教典籍の稀観本に関しては、前年度より調査を開始している。しかし、仏教以外の稀観本までは調査が行き届いていないのが現状である。したがって、本学に所蔵する稀観典籍を総合的に把握することが急務である。そのためには、まず、稀観典籍を目録化しなければならない。そして、稀観典籍の基礎調査を行うことにな

る。その場合、図書としての調査と文化財としての調査という二つの面で行うことが必要となる。そのうえで、稀観典籍として選定された文献の総合的な研究を行い、公開方針を定めて、影印・翻刻の作業に入っていきたいと考えている。

現代思想研究

大谷大学 FD 研究 —大谷大学における FD の 基礎構築—

キャップ・教授 並木 治
(フランス文学)

学生の学力や意欲の多様化ないし全体的低下が指摘される今日、われわれは、学内外の豊かな研究成果をふまえて、これまで以上に仏教精神によってたつ本学に真に相応しい FD を追求しなければならないと考えている。すなわち本学の FD とは、足らざるものを補うことを主目的とする補習教育の充実や、教育技術の開発・向上に終始すべきものではなく、それぞれの学生の長所を伸ばして意欲を引き出し、双方向的学びあいのなかで個々のボーダーを越えさせ、学びの満足感を実感させることを目指す FD であり、学びの自信と豊かなコミュニケーション能力を獲得させる FD でもなければならないであろう。今年度の「大谷大学 FD 研究」の研究目的がここに絞られることは言うまでもない。

ともすると従来陥りがちだった一方向的で画一的な教育を越え、教師と学生とを、共に学び、知的に刺激しあう学びの共同体の構成員同士として捉える新たな意識と視点が、今後の FD 研究には欠かせないと思われる。それによってこそ本学の建学精神に根ざした人間性重視の FD を構築しうるものと考えられるからである。こうした目標に向かい、これまで以上にさまざまな観点から、本学 FD 基礎構築のための研究を地道にかつ精力的に継続していくつもりである。

前置きが長くなったが、2002年度は、過去3年間の研究成果を据えつつ、学内16名の研究員と、学外で FD の第一線に立られている京都文教大学の中村博幸氏と、昨年まで本学の英国英語研修でコーディネーターとチューターをつとめられ、学生たちから絶大な信頼と人気を博したジュディス・R・アイレット氏のお二人を嘱託研究

員としてお迎えし、計18名の研究スタッフで研究を継続しさらに発展させていきたい。

今年度は、これまで通り、学内外の FD 研究に関する情報収集と分析に加え、とりわけ急務と思われる導入教育における授業活性化の研究に重点をおきながら、より活発な意見交換と連携を深めていく。ブレーンストーミングを応用した発想法重視型基礎演習のあり方に関する研究、マルチメディア応用授業の新たな可能性の研究、教員間および教員と学生間情報交換と学びの共同体意識形成のための双方向型授業の可能性に関する検討、授業評価のあり方に関する研究、近い将来に予想される学内正式組織としての FD 委員会立ち上げを見据えての、学内諸組織・諸部門との連携、ひろく授業に関わる諸問題について定期的に情報交換し検討する公開研究会の開催、昨年度に引き続き、「FD 報告集」の刊行等、FD 研究を広く心のコミュニケーションとネットワークの視点から見直しつつ、授業活性化のための具体的施策の研究を行う予定である。

現代思想研究

大谷大学 DB 研究 —大谷大学における DB 構築の基礎的研究—

キャップ・教授 草野 顕之
(日本史学)

2001年10月、近代化100周年を記念して大谷大学真宗総合学術センター（響流館）が竣工し、広く世界に向けての新たな情報発信の拠点として機能しはじめた。いまや、大谷大学の貴重な学的資産を、劇的に発展するデジタル化の世界において活用しうるデータベースとして構築することこそ、本学の使命であろう。しかしこれまで個々の研究班や個人によってさまざまな資料のデータベース化が試みられてきたが、全学的な視座からデータベースを構築することは無かった。本研究班では、大谷大学におけるデータベース構築の全学的な視野からの検討とデータベース構築の具体的な実施、およびその公開方法についての検討を行なう。

課題となるさまざまなデータベース構築については各研究員が分担して行なう。また、全学的な取り組みが必要と思われるので、本研究員、嘱託研究員はもちろん、

さらには学内の協力者をえて「大谷大学データベース構築に向けての研究会」を組織し、データベース構築についての課題を広く学内で共有していきたい。

本年度は、昨年度から継続中の、

- 1 北京版西藏大藏經のデジタル画像データベース化
 - 2 清沢満之自筆本のデジタル画像データベース化
- をさらに推進し、また、新たに
- 3 大谷大学所蔵北里蠟管資料の音声データベース化に必要とされる基礎的研究を開始する。同時に、
 - 4 親鸞の真跡などの重要な文献のデジタル画像データベース化
 - 5 大谷大学図書館蔵貴重図書の目録作成
 - 6 研究所のホームページをもちいたデータベース公開

についても検討を重ねていきたい。

2002(平成14)年度「一般研究」研究目的紹介

共同研究

『十門弁惑論』の研究

研究代表者 一色 順心
(仏教学)

『十門弁惑論』3巻(大正蔵52巻所収)は、大慈恩寺の復礼が太子文学権無二の質問に応じて表わした護教論文である。復礼はその生卒年を明らかにしないが、諸経録の記述によって武周期の人であることが確認できる。武周期は実叉難陀や菩提流志などの外来三蔵も多く来朝し、新しい経典が次々と紹介され、仏教が大いに発展した時期である。

そのような革新的な時代の中で仏教者たちは何を課題とし、仏教をどのように理解していったのだろうか。また、そうした仏教の発展と政治はどのように関係していたのだろうか。こうした問題を考えようとするとき、『十門弁惑論』は、実に様々な問題を提起してくれるはずである。それは何故かと言うと、第1には復礼が武周期の経典翻訳のほぼ中心にいたということを挙げることができるからである。この点は、華嚴宗の法蔵や法相宗の慧沼らと共通する点であり、彼らが華嚴宗や法相宗の教学の展開に果たした役割を鑑みる時、改めて復礼との関係が注目されるのである。また、武周期の経典翻訳は、則天武後の大きな影響下にあったので、復礼が経典翻訳の中心にいたということは権力の中心に近かったということをも意味する。こうした点は他の仏教者にも言えることであり、仏教と政治がどのように関係していたのかを窺い知ることができるのではないかと考えられるのである。第2に特に法蔵との関係でいえば、復礼が『華嚴経』や『大乘起信論』を学んでいたことも知られているし、法蔵と教学上の論争があったことを記す資料も存在しており、法蔵の華嚴教学に与えた影響が注目されるからである。法蔵の思想が中国仏教の一大頂点であることは否めないが、それがどのような背景に基づくものであるかはこれまであまり研究されてこなかった。こうした点を究明していくための好個の材料となるはずである。第3に復礼が著した『真妄頌』は後代の澄観や宗密に大きな

影響を与えているという事実があり、この点からも復礼の教学の思想的意義が注目されるのである。復礼を華嚴教学者の系譜に位置付ける見解は前例を見ないが、この点も視野に入れて考察を加えてみたいのである。

以上のような位置にある復礼の思想を明らかにするために、唯一現存する復礼の著作である『十門弁惑論』を解読研究して、復礼の思想及びその時代的な位置付けを明らかにするのが本研究の目的である。

個人研究

ジェイン・オースティンの 文体論的研究

研究代表者 浅若 裕彦
(英文学)

文学における自由間接話法について考えるとき、19世紀イギリスのジェイン・オースティンは、外すことのできない作家の一人である。『英語文体論辞典』(*A Dictionary of Stylistics*)の中でケーティ・ウェールズは「自由間接話法の系統立った使用はオースティン以降の作家に見られる」と述べ、自由間接話法のパイオニアとしてオースティンに言及している。しかし実際には、自由間接話法という技法自体は、18世紀には既に小説中で広く用いられるようになっており、その意味ではオースティンはパイオニアと呼ぶべき存在ではない。しかしこれまでオースティンが自由間接話法の使い手として注目を集めてきたことは事実である。その理由は、オースティンのこの技法の用い方に、それまでの作家とは一線を画する点が見られたからではないだろうか。特に彼女の遺作となった『説得』(*Persuasion*)に見られるような、心理描写における自由間接話法を含めた話法の用い方は、その後の作家に大きな影響を与え、「意識の流れ」と呼ばれる技法につながっていったと思われる。

こうした話法の用い方を中心に、オースティンの技法的な面での特徴を、彼女と同時代、あるいはその前後の作家と比較することによって明らかにし、イギリス小説の歴史の中で彼女の位置付けを探っていきたい。そのため、次のような手順で研究を進めていく予定である。

1. ジェイン・オースティンと同時代の作家（マライア・エッジワース、ファニー・バーニー等）、あるいはその前後の作家の作品を資料として収集する。
2. 収集したテキストから、話法の使用、あるいはその他の技法の使用が認められる箇所を取り上げ、整理、比較検討を行う。
3. 関連の研究書、研究論文を収集し、考察の参考とする。
4. これらの収集資料をもとに、オースティンの小説技法の特質を明らかにする。

海外学会参加報告

北京蔵学セミナーに参加して

西藏語文献研究 研究員 白館 戒雲

北京蔵学セミナー (Beijing Seminar on Tibetan Studies 主催：中国蔵学中心、西藏社会科学院)に参加するため、2001年7月23日、北京に到着。空港では旧知の中国蔵学中心・ダムドゥル (dGra 'dul) 氏による出迎えを受ける。会議は、25日から28日まで、使用言語はチベット語・中国語・英語である。全体会議では同時通訳が、各分科会には英語の通訳が付いた。25日午前は、中国蔵学中心総幹事・ハクパ・ブンツォー (Hag pa phun tshogs) 氏のあいさつで始まり、つづいて全体会議がおこなわれた。西藏社会科学院所長・ツェワン・ギュルメー (Tshe dbang 'gyur med) 「西藏蔵学研究五十年」、陳慶英「関于『漢藏史集』作者的探討」他計7本の論文が発表された。同日午後からは社会学、経済学、歴史学1、歴史学2、宗教学、文学芸術、言語文字、蔵医学の8つの分科会に別れての論文発表および討論がおこなわれた。私は宗教学の分科会に属し、26日午前「Tshad ma'i skyes bu'i skor (量大夫について)」と題する発表をおこなった。28日には故宮所蔵のチベット関係文物を拝観した。この討論会には、チベット語文献の複製出版で多くの業績をのこしている Gene Smith 氏や、文化人類学者で近年新たに現代チベット語—英語辞典を出版した M. Goldstein 氏など、多くの著名なチベット学者が参加しており、貴重な意見交換をすることができた。また討論会参加のチベット人学者に、現代の仏教学者の成果を盛り込んだ拙著および『菩提道広論』の典拠集を寄贈した。

29日、青海省・西寧空港に到着。青海省は、人口500万。うちチベット人は90万だという。この地域は、チベットの地理区分でいえばアムドにあたる。アムド内に数多く存在する寺院の中で往時の姿をほぼ留めているのは、青海省湟中県魯沙爾鎮の南方にあるクンブム・チャムパリン (sKu 'bum Byams pa gling、塔爾寺) 寺と甘肅省夏河県にあるラプラン・タシキル (Bla brang bKra shis 'khyil) 寺の2つである。まずはクンブム寺へ向かう。同寺は、ゲルク派の開祖ツォンカバの誕生地に建てられており、1500年に本格的に造営が始まった。ゲルク派6大寺院の1つである。最盛期には5000あまりの僧侶

を擁していたというが、現在は500人程度。チベット人、モンゴル人、中国人など様々な民族出身の僧侶がいる。現在、施主の中心は中国人である。寺院内での日常会話も主に中国語が使われている。

クンブム寺と大谷大学とは縁が深い。1901年(明治34年)、7月11日から8月2日までの間、チベット仏教僧として初めて日本を訪問した第5世アキヤ・リンポチェ (A kya Blo bzang bstan pa'i dbang phyug bsod nams rgya mtsho, 1870-1909) は同寺の活仏である。その際に尽力したのが、大谷大学に北京版カンギル・テンギルをもたらした、チベット語を講じていた寺本婉雅 (1871-1940) である。彼は、同寺に長期間滞在し、チベット仏教や文化の研究を行ったのである。

現在のアキヤ・リンポチェは転生を重ね第7世、彼は今、アメリカに亡命中である。中国仏教協会の副会長として中国政府からの信頼厚い人物であった彼が、何ゆえ亡命したのか、当初私には理由が理解できなかった。後、彼自身がある新聞に語ったところによると、中国政府の認定したバンチェン・ラマを認めることを強要されたのがその理由であるという。

さて、同寺で使用されているチベット語はアムド方言である。アムド方言はラサ方言とまるで違い、意志の疎通も不可能に近い。そこで、ラサ方言を使える者を探すと、セルドク・リンポチェ (gSer tog rin po che) のもとに案内された。セルドク・リンポチェは先述のアキヤ・リンポチェとならび同寺を代表する活仏である。その先々代のロサン・ツルティム・ギヤムツォ (Blo bzang tshul khri ms rgya mtsho, 1845-1915) は、同寺の仏殿を修繕し、『クンブム寺誌 (Chos sde chen po sku 'bum byams pa gling gi gdan rabs rten dang brten par bcas dkar chag ched du brjod pa don ldan tshangs pa'i dbyangs snyan)』をはじめとする数多くの著作を残した人物である。アキヤ・リンポチェ同様モンゴル人であるが、タシルンポ寺で長期間修行した経験があるので、シガツェ方言を操り、意志疎通が可能である。しばし歓談する。

翌30日、インドのデブン・ゴマン学堂で修行経験のあるタムチョー・ジクメー (Dam chos 'jigs med) という

ゲシェーの案内で、クンブム寺内を拝観。先述のとおり同寺はツォンカパの生誕の地に建てられているのであるが、その名の由来は次のとおりである。すなわち、ツォンカパ誕生の際、切断したへその緒から1滴の血が地に落ちた。そこから1本の菩提樹が生えた。その葉1枚1枚に文殊の仏像が浮かび上がり、10万を数えるほどになった。それゆえ、10万(ブム)の仏像(ク)＝クンブムといわれるのである。まず、その菩提樹(Phags gnas mchod sdong chen mo)を拝観。ついでツォンカパ3歳の時の足跡、母の頭蓋骨、弥勒堂(Byams khang)、文殊堂(Jam dbyangs kun gzigs lha khang)、密教学堂(rGyud pa grwa tshang)、時輪学堂(Dus 'khor grwa tshang)、大集会堂(Tshogs chen 'du khang)、医学学堂(sMan pa grwa tshang)等を拝観した。

31日、稀観文献調査のために印経院(Par khang)に向かう。幸いなことに文化大革命の被害を蒙ることなく、ウユクパ(U yug pa bSod nams sengge, d.1253)の『積量論註』をはじめとする稀観文献、ツォンカパ師弟全集(rJe yab sras gsum gyi gsung 'bum)、セラ・ジェツンパ(Se ra rje btsun pa Chos kyi rgyal mtshan, 1469-1544)およびジャムヤン・シェーパ(Jam dbyangs bzhad pa Ngag dbang brtson 'grus, 1648-1721/1722)による教義学の教科書等、数多くの木版が所蔵されていた。

8月1日青海湖(mTso sngon po)に向かう。途中、「日月山(Nyi zla ri bo)」を通る。7世紀、ソンツェンガムポ(Srong btsan sgam po)王に降嫁する文成公主を唐の皇帝がここまで見送ったといわれている。標高は3000メートル、かなり冷える。この山を越えると、遊牧地に入る。それまでの沿道では中国人や回族ばかりがめだっていたが、ここからはチベット遊牧民の世界である。

8月2日、化隆県にあるチャキュン(Bya khyung)寺に向かう。しばらくしてチュクリ・ダジヨム・ワンチュク(Phyug ri dgra 'joms dbang phyug)という峠を通る。そこには祈りの旗・タルチョが数多く立つ石塚・ラプゼエ(la rdzas)があった。年に1回この塚を祀る習慣があるのだが、この日がちょうどそれにあたっていた。何百人もの中国人がチベット風の祀りを行なっており、驚いた。後で聞くとところによると、チベット風にサン(bsang)を焚く中国人は数多いとのことであった。チベットの習慣、それも極めて土着的色彩の濃い宗教習慣が中国人に広まっているこの現象は、この地域の文化を考察する上で極めて興味深い。

チャキュン寺は1349年、チョージェ・トンドゥブ・リ

ンチェン(Chos rje Don grub rin chen, 1299-1375)によって建立され、ツォンカパが16才まで修行を行なった寺である。また、ゲルク派の最高位であるガンデン・ティーパを3人も輩出した。同寺を訪問した時、アラール・シャルドン・リンポチェ(A lags Shar gdong rin po che)が時輪の大灌頂を行なっている最中であった。チョージェ・トンドゥブ・リンチェンの遺影塔の安置されているセルドゥン・ハカン(gSer gdung lha khang)、ツォンカパが文殊の真言「アラパツァナ」を唱える行をおこなったアラパツァナ・ハカン(A ra pa tsa na'i lha khang)等を拝観した。ツォンカパの修行場の地形は私が思い描いていたとおりであった。

チャキュン寺を後にして、マチュ(rMa chu、黄河源流)河にかかる橋を越えて、大学者ゲンドゥン・チョーベル(dGe 'dun chos 'phel, 1903-1951)生誕の地・レブコン(Reb khong、同仁県)に至る。ドゥブチェン・ケルデン・ギャツォ(Grub chen sKal ldan rgya mtsho, 1607-1677)の歴代転生者の寺・ロンポ・ゴンチェン(Rong po dgon chen)寺を拝観する。チャキュン寺とレブコン大寺にはそれぞれ500人の僧侶がいる。アムド地方であるので教義学の教科書としては、後述するラプラン寺の影響を考え、ジャムヤン・シェーパの教科書を使っているのかもしれないが、両寺ともセラ・ジェツンパのものを使っている。その理由は簡単で、チャキュン寺出身の第54代ガンデン・ティーパ・ガワン・チョクデン(Ngag dbang mchog ldan, 1677-1751)はセラ・チュー学堂(Se ra Byes pa grwa tshang)の、ロンポ・ゴンチェン寺の歴代ケルデン・ギャムツォはガンデン・チャンツェ学堂(dGa' ldan Byang rtse grwa tshang)で学ぶことになっていたからだ。両学堂とも教科書はセラ・ジェツンパのものである。このような師資相承のありかたは、チベット仏教の特色といっていだろうか。(なおセラ・チュー学堂の伝承に、5世ダライラマの次のような言葉が伝わっている。「教科書には4種ある。言葉と意味の2つを供えているセラ・ジェツンパの教科書。言葉はあるが意味のないジャムヤン・シェーパの教科書。言葉はないが意味のあるペンチェン・ソナム・タクパ(Pan chen bSod nams grags pa, 1478-1554)の教科書。そして言葉も意味もない教科書である」)

8月3日、歴代ジャムヤン・シェーパの寺・ラプラン寺を訪問する。1709年に建立が開始された、ゲルク派6大寺の1つである。往時は3600人ほどの僧侶を擁していたが、現在は1200人程度である。総じて、僧侶は戒律を正しく守っており、学問の水準も高い。

印経院の1僧侶に、学徳の高いゲシェーへの面会を申し入れると、ゲンドウン・ギャツォ (dGe 'dun rgya mtsho) 師のもとに案内される。師はちょうどアビダルマの講義中であった。講義終了後の11時、師と面会。会話を始めるや、すぐに意気投合、チベット仏教についての意義ある議論ができた。師は70才。1958年27才の時から1980年までの間、經典類を読むことを禁ぜられ、食料もなく、無毒な草を食べて飢えをしのいだという。拙著および『菩提道広論』の典拠集を寄贈、同寺の学者たちにぜひ読んでいただき、感想をうかがいたい旨申し上げると、たいへんお喜びであった。

4日、大集会堂および奥堂、歴代ジャムヤン・シェーバの遺影塔等を拝観する。その後、喜金剛学堂 (Kyairdor grwa tshang)、時輪学堂 (Dus 'khor grwa tshang)、上部密教学堂 (rGyud stod grwa tshang)、医学学堂 (sMan pa grwa tshang)、下部密教学堂 (rGyud smad grwa tshang) を拝観する。下部密教学堂では同堂の管理僧の部屋に招かれる。「密教の基本經典 (rgyud gzhung = グヒヤサマージャ・タントラ (Guhyasamāja-tantra, Otani. 81) の第1章から第12章まで) を暗記しているか?」と尋ねると、「もちろんだ。我々は密教僧だ」との答。彼によれば、下部密教学堂には115人、他4学堂にもほぼ同数の僧侶が所属しており、顕教の教義学堂 (mtshan nyid grwa tshang) には500人ほどが所属しているという。

ラプラン寺について特筆すべき点は、その文献所蔵量である。現在も17833点もの文献が所蔵されており、2点の貝葉サンスクリット写本を含む。1つはランチャ文字で書かれた月称所持の『中論仏護註』であり、もう1点はヴァルトゥ文字で書かれたアティーシャ所持の写本であるという。カンギュール、テンギュール、チベット選述文献をあわせると少なくとも60000冊あまりが所蔵されている。ジャムヤン・シェーバ3世 ('Jam dbyangs bzhad pa 03 Blo bzang thub bstan 'jigs med rgya mtsho, 1792-1855) の秘書であったアク・リンポチェ・シェーラブ・ギャムツォ (A khu rin po che Shes rab rgya mtsho, 1803-1875) 著の稀観文献リスト *dPe rgyun dkon pa 'ga' zhid gi tho yig don gnyer yid kyi kunda bzhad pa'i zla 'od 'bum gyi snye ma* はジャムヤン・シェーバ1世および2世 ('Jam dbyangs bzhad pa 02 dKon mchog 'jigs med dbang po, 1728-1791) が中央チベットからもたらした文献のリストであるから、同リスト所載の文献はここラプラン寺に所蔵されているといえよう。ゲンドウン・ギャツォ師を再訪。ポトバ (Po to ba Rin chen gsal, 1027-1105) の教説でその弟子トルパ (Dol pa, 1059-1131) が編纂した『ベウブム・ゴンポ (Be'u bum sngon po)』とその注釈、『リクテ

ル』のタルマリンチェン (rGyal tshab Dar ma rin chen, 1478-1554) 註を頂戴する。タルマリンチェン註はラプラン寺版しかない旨申しあげると、「中央チベットにあるにちがいないと思う」とおっしゃるので、ラプラン寺版の奥付けを確認した。すると私の言うとおり、ラプラン寺にしかないと記してあった。

5日、北京に。空港にはダムドゥル氏とともに、19才になるニマ (Nyi ma) という女性が出迎えに来ていた。ニマは、1958年ツァブラン (rTsa hreng) 県の県知事代理として赴任した私の叔父のチャンチュブ (Byang chub) の孫娘である。祖父の親戚に会うのは初めてであるという。彼女と対面して私は、時代の流れを感じざるを得なかった。

第五回国際法華經学会に参加して

国際真宗学研究 キヤップ ロバート・F・ローズ

2002年の5月4日から7日まで、ドイツのマールブルグ大学で開催された第五回国際法華經学会に参加する機会を得た。この学会は二十年ほど前にハワイ大学で第一回大会が開かれて以降、第二回大会は立正大学で、第三回大会は再びハワイ大学で、第四回大会はオランダのライデン大学で、それぞれ開催されてきた。国際学会にふさわしく、今回も中国・イギリス・ドイツ・日本・アメリカの諸国から32人の法華經研究者が参加した。

会場となったマールブルグ大学は1527年に創立されたドイツ最古のプロテスタント系大学として知られている。特にこの大学の神学部は長い伝統を持ち、キリスト教の非神話化を提唱して世界中に大きな波紋を呼び起こしたルドルフ・ブルトマン Rudolf Bultmann (1884—1976) や宗教学の名著である *Das Heilige* (『聖なるもの』) を著わしたルドルフ・オットー Rudolf Otto (1869—1937) も長年ここで教授を勤めていた。現在宗教学科には以前本学の大学院特別セミナーの講師を勤めたマイケル・パイ (Michael Pye) 教授が教鞭を取っている。彼は日本宗教を幅広く研究されている著名な学者であり、法華經にも深い関心を持っておられる。

マールブルグはフランクフルトの北80キロに位置する美しい大学町である。今でも町の中心の丘には宗教改革運動の指導者であったルターとツヴィングルの会談が行われたことで有名な城が残り、中央広場の周辺には中世からの建物が大切に保存されている。学会初日の公開講演会は近代的な大学の教室で行われたが、それ以降の研究発表はすべて城に通じる道に面した、1575年建設の石館を改造した宗教学科のセミナー・ルームで行われた。

さてその公開講演会は5月4日(土曜日)の午後三時から開始され、学会と大学の関係者の挨拶の後、約50人の聴衆を得て三つの講演が行われた。まず最初に世界的なインド学の権威であるマールブルグ大学のミカエル・ハーン (Michael Hahn) 教授は「インド学のテーマとしての法華經」(The Lotus Sūtra as a Theme in Indological Studies) という題のもと、西洋を中心に法華經の研究の歴史について詳しく説明された。次に大正大学の一鳥正真教授の「止観に影響された日本の詫文化」(The

Japanese Culture of Wabi as Influenced by Calmness and Insight) という講演が予定されていたが、先生はご病気で学会を欠席したため、前もって先生の用意されたペーパーが代読された。最後にパイ教授は「法華經とその研究方法」(The Lotus Sūtra and Ways of Studying It) について興味深い発表を行った。(学会は原則としてすべて英語で行われたため、プログラムや学会中に配られたペーパーに記載されていた発表タイトルはすべて英語であった。しかし読者の便宜を図るため、この報告では発表タイトルを英文と私自身の和訳の両方で示すことにする。)

翌日からは場所を宗教学科のセミナー・ルームに移し、二日間に渡り18の研究発表が行われた。それらを一々紹介することは差し控えるが、特に私が関心を持ったものをいくつか取り上げてみたい。全発表タイトルを含む学会プログラムは本報告の後に挙げておく。

まず最初の三友健容教授の発表は、新しく発見された東京大学所蔵の「法華經集驗記」についての報告であった。この古写本は昨年八月に印度学仏教学会が東京大学で開催された際に展示されていたものであったが、この発表はその作者や内容について詳しく論じたものであった。身延山大学の三輪是法教授は「『物語』としての法華經」という発表を行ったが、narrative という最近の新しい研究方法の視点から法華經を取り上げた点で注目すべきものであった。また同じ身延山大学の池上要靖教授は「法華經におけるジェンダー」という重要な課題について、法華經に見られる kula-putra と kula-duhitri の語を通じて考察された。立正大学の高橋堯英教授は「ナーガ信仰と法華經」(The Cult of Naga and the Lotus Sūtra) において、インドの考古学的資料を駆使して、法華經成立時におけるナーガ信仰を解明する斬新な研究であった。米国バークレイにある Graduate Theological Union (GTU) のリチャード・ペイン (Richard Payne) 教授はインド仏教における陀羅尼についての詳しい研究を発表した。またマールブルグ大学の若い研究者イェンス・ウィルケンズ (Jens Wilkens) 氏は法華經と金光明經の仏身論を比較した緻密な研究発表を行い、ドイツの徹底した文献学

による仏教研究の一旦を示してくれた(「法華経と金光明経に見られる如来の寿命」[The Length of Life of the Tathāgata as presented in the Lotus Sūtra and the Sūtra of Golden Light])。

当然のことながら、日本における法華経についての研究発表も多く行われた。たとえばロンドンの東洋アフリカ研究大学(SOAS)のルチア・ドルチェ(Lucia Dolce)教授は従来あまり注目されてこなかった「日本における法華経の密教的解釈」(Esoteric Interpretation of the Lotus Sūtra in Japan)というテーマで発表された。また日蓮の法華経理解についての発表も多く行われたが、その中でも立正大学の北川前肇教授の「一々文々是仏身一日蓮上人の文字信仰」(Ichi-Ichi-Mon-Mon-Ze-Shinbutsu'-St. Nichiren's Faith in Scripts)は数種類の美しい法華経写本を紹介し、聴衆の関心を強く引き付けた。また最近天台本覚思想に関する研究を著わしたプリンストン大学のジャクリーヌ・ストーン(Jacqueline Stone)教授は「日蓮の思想における法華経・政治・日本」(The Lotus Sūtra, Politics, and Japan in the Thought of Nichiren)という刺激的な発表を行った。

さらに私が司会を勤めたパネル、「天台宗における法華経」(The Lotus Sūtra in the Tiantai [Tendai] Tradition)では天台思想の諸問題が取り上げられたが、そこで行われた三つの発表はそれぞれ興味深いものであった。大正大学の塩入法道教授の「天台教学における観音経の理解——一切を心と信と観す」(Understanding the Kuan-yin-Sūtra according to T'ien-t'ai Doctrine: Contemplation of All Things as Mind and Faith)は天台における伝統的な観音経解釈を分かりやすく解説したものであった。バージニア大学のポール・グローナー(Paul Groner)教授の「実導仁空の法華経を通じての戒律解釈」(Jitsudo Ninku's Interpretation of Monastic Discipline through the Lotus Sūtra)は天台宗において展開された法華経にもとづいた様々な戒律理解を的確にまとめて紹介したものであった。大正大学の斉藤田真教授の「寂照について」(On Jakusho)は、この入宋僧の生涯を現存する文献を網羅して論じられた優れた発表であった。

またほとんどの発表が法華経のテキストや他の文献を中心に展開されていたのにたいして、クロアチア出身で現在ウルツブルグ大学で教鞭を取られているスゼザナ・ゾリック(Snjezana Zoric)教授の「法華経の儀礼的変換」(Ritual Transformations of the Lotus Sūtra)は、文化人類学的視点より韓国の仏教儀礼における法華経の役割を考察した注目すべきものであった。

最後に、研究発表ではないが、今学会で特に興味深かったのは5月5日に行われた法華経の宗教ドラマであっ

た。その指導を勤めたのはマールブルグ神学部の実践神学を専門とするゲルハルト・マルセル・マルチン(Gerhard Marcel Martin)教授であった。当日の研究発表終了後、私たちは旧市街の神学部の建物へと移動し、壁にそって椅子が置かれている外にもない大教室に案内された。そこでマルチン教授は法華経の長者窮子の比喻の中から特に重要と思われる場面を5カ所ほど紹介し、その一々を私たち参加者に自分のイメージにもとづいて演じるよう指導した。たとえば最初に与えられた課題は失踪した息子を探し求める父の心を思い浮かべ、それを演じるというものであったが、そのとき50人近くいた私たちは一斉に子供をなくした父になりきって広い教室のなかをさまよひ歩いた。また長者になった父が獅子座にすわる場面や長者が息子に出会う場面などを数人の参加者に演じてもらい、それについてのディスカッションも行った。このように長者窮子の物語りを実際に演じることにより、この物語りをより深く理解することができて、たいへん有意義であった。マルチン教授はこの種の宗教ドラマを様々なキリスト教団体の要請に応じてしばしば行っていると聞いたが、仏教においてもこのような新しい実践神学的手法を取り入れるべきことを痛感した。

なお、今回の国際法華経学会は米国バージニア大学で開催されることが決定されている。今回同様、次回の会も有益なものになるであろう。

第五回国際法華経学会プログラム

5月4日(土)

11:00 レジストレーション

15:00~17:00 公開講演

1. ミカエル・ハーン (Michael Hahn)

マールブルグ大学

「インド学のテーマとしての法華経」
(The Lotus Sūtra as a Theme in Indological Studies)

2. 一鳥 正真 大正大学

「止観に影響された日本の詫文化」
(The Japanese Culture of Wabi as Influenced by Calmness and Insight)

(一鳥教授はご病気で欠席したため、この発表は代読された)

3. マイケル・パイ (Michael Pye) マールブルグ大学

「法華経とその研究方法」
(The Lotus Sūtra and Ways of Studying It)

18:00 マールブルグ大学宗教博物館見学

5月5日(日)午前

9:30~11:00

パネル1 「テキストと物語りとしての法華経」
(The Lotus Sūtra as Text and Narrative)

司会 マイケル・パイ

1. 三友 健容 立正大学
「法華経集験記—東京大学所蔵の古写本」
(Hokekyo Shu Ken Gi: An Ancient Manuscript Preserved in Tokyo University)
2. 望月 海慧 身延山大学
「法華経はインドでいかに読まれたか」
(How Was the Lotus Sūtra Read in Indian Buddhism?)
3. 三輪 是法 身延山大学
「『物語』としての法華経」
(The Lotus Sūtra as "Narrative")

11:30~12:30

パネル2 「法華経の特殊テーマ」

司会 マイケル・パイ

1. イェンス・ウィルケンス (Jens Wilkens)
マールブルグ大学
「法華経と金光明経に見られる如来の寿量」
(The Length of Life of the Tathāgata as presented in the Lotus Sūtra and the Sūtra of Golden Light)
2. 池上 要靖 身延山大学
「法華経におけるジェンダー」
(Gender in the Lotus Sūtra)

14:30~16:00

パネル3 「法華経の特殊テーマ」(II)

司会 ブライアン・ボッキング (Brian Bocking) SOAS

1. 小谷 幸雄 立正大学
「空中の舞台におけるバイオセントリック・ドラマ—見宝塔品から涌出品を中心に」
(Biocentric Drama on the Stage Suspended in the Air; Chiefly from the Contemplation of the Ratna-Stupa to the Gushing Out of the Bodhisattvas)
2. リチャード・ペイン (Richard Payne) GTU
「法華経における陀羅尼—
インドにおける言葉の力」
(Dhāranī in the Lotus Sūtra: The Indic Context for the Power of Words)
3. 高橋 堯英 立正大学
「ナーガ信仰と法華経」
(The Cult of Naga and the Lotus Sūtra)

17:00~19:30

法華経の宗教ドラマ

指導ゲルハルト・マルセル・マルチン

(Gerhard Marcel Martin) マールブルグ大学

5月6日(月)

9:30~10:30

パネル4 「テキストと信仰」(Text and Cult)

司会 ロバート・ローズ (Robert Rhodes) 大谷大学

1. 北川 前肇 立正大学
「一々文々は仏身一日蓮上人の文字信仰」
(‘Ichi-Ichi-Mon-Mon-Ze-Shinbutsu’-St. Nichiren’s Faith in Scripts)
2. スゼザナ・ゾリック (Snjezana Zoric)
ウルツブルグ大学
「法華経の儀礼的変換」
(Ritual Transformations of the Lotus Sūtra)

11:00~12:30

パネル5 「天台宗における法華経」

(The Lotus Sūtra in the Tiantai [Tendai] Tradition)

司会 ロバート・ローズ

1. 斉藤 円真 大正大学
「寂照について」(On Jakushō)
2. ポール・グローナー (Paul Groner)
バージニア大学
「実導仁空の法華経を通じての戒律解釈」
(Jitsudo Ninku’s Interpretation of Monastic Discipline through the Lotus Sūtra)
3. 塩入 法道 大正大学
「天台教学における観音経の理解—
一切を心と信と観す」
(Understanding the Kuan-yin-Sūtra according to T’ien-t’ai Doctrine: Contemplation of All Things as Mind and Faith)

14:30~15:30

パネル6 「法華経と人生への取組」

(Contesting the Sūtra, Contesting Life)

司会 アデルハイド・ヘルマン=ファン

(Adelheid Herrmann-Pfandt) マールブルグ大学

1. ジャクリーヌ・ストーン (Jacqueline Stone)
プリンストン大学
「日蓮の思想における法華経・政治・日本」
(The Lotus Sūtra, Politics, and Japan in the Thought of Nichiren)
2. ブライアン・ボッキング (Brian Bocking) SOAS
「法華経の使用と悪用」
(The Use and Abuse of the Lotus Sūtra)

16:00~17:30

パネル7 「法華経の受容」

(Appropriating the Lotus Sūtra)

司会 アデルハイド・ヘルマン=ファン

1. ルチア・ドルチェ (Lucia Dolce) SOAS
「日本における法華経の密教的解釈」
(Esoteric Interpretation of the Lotus Sūtra in Japan)
2. Wang, Zhong Yao, Institute of Religious Research,
Hang Zhou University of Commerce
「宗教美術と民間信仰における観音」
(Guanyin in Religious Art and in Folk Religion)
3. マイケル・パイ (Michael Pye) マールブルグ大学
「仏教巡礼における観音信仰の諸相」
(Aspects of the Lotus-based Kannon [Guanyin] Cult
in Buddhist Pilgrimages)

5月7日(火)

今後に向けての相談(次回開催地、出版計画など)

真宗総合研究所彙報 2002.4.1 ~ 9.30

■研究所委員会

◎真宗総合研究所委員会

- 5月29日(水) 12時10分 (尋源館会議室)
 1. 今年度の指定研究の研究組織について
 2. 客員研究員の認定について

○指定研究キャップ連絡会

- 4月12日(金) 17時50分
(真総研ミーティングルーム)
 1. 今年度の指定研究の研究組織について
 2. 新研究所の立ち上げに関して

○指定研究事務担当者連絡会

- 6月25日(火) 16時10分
(真総研ミーティングルーム)
 1. 今年度の指定研究の研究組織について
 2. 研究遂行上の諸点について

○一般研究代表者連絡会

- 7月4日(木) 17時50分 (響流館総合事務室)
 1. 研究遂行上の諸点について

■指定研究研究会

清沢満之研究

《清沢満之全集編集委員会》

- ◇4月3日(水) 14時 (響流館会議室)
 1. 既刊全集未収録文献の収録に関して
 2. 依拠本の変更について
 3. 全集の最終構成案について
 4. その他
- ◇7月10日(水) 18時30分 (響流館会議室)
 1. 全集の最終構成案について
 2. 刊行予定について
 3. その他

《資料調査》

- ◇4月30日(火) (愛知県豊橋市及び碧南市)
清沢満之書簡の調査
- ◇4月30日(火) (同朋大学仏教文化研究所)
「宗教哲学講義」の調査
- ◇5月12日(日) (富山県砺波市 真寿寺)
清沢満之書簡の調査
- ◇5月31日(金)～6月2日(日) (愛知県西方寺)
清沢満之自筆稿及び写真の調査
- ◇6月27日(木) (東京岩波書店)
全集第1巻及び第2巻の入稿のため
- ◇8月9日(金) (愛知県西方寺)
清沢満之自筆稿の再撮影

真宗学事史研究

《全体会議》

- ◇5月27日(月) 18時 (真総研ミーティングルーム)
 1. 前年度研究班 (大谷大学近代史研究班) からの
資史料の引き継ぎについて
 2. 今年度の研究計画について
- ◇6月24日(月) 18時 (真総研ミーティングルーム)
 1. 「学徒出陣」および「勤労報国」に関するアン
ケート (前年度研究班より引き継ぎ) の現状
確認と、公刊に向けての作業内容・手順の決定
 2. 資史料の整理と内容の検討のあり方について
- ◇7月15日(月) 18時 (真総研ミーティングルーム)
 1. 「アンケート」執筆者への掲載依頼・掲載内容
の確認について
- ◇9月9日(月) 18時 (真総研学事史研 研究スペース)
 1. 「アンケート」原稿の整理および編集方針につ
いて
- ◇9月30日(月) 18時 (真総研学事史研 研究スペース)
 1. 「アンケート」原稿の読み合わせについて
 2. 「アンケート」の編集・出版について

真宗教学研究

《研究会》

- ◇5月14日(火) 14時30分 (真総研ミーティングルーム)
昨年度までの研究成果の報告および
今年度の研究方針について
 - ◇5月24日(金) 14時30分 (真総研ミーティングルーム)
今年度の研究方針について
 - ◇6月14日(金) 16時10分 (真総研ミーティングルーム)
親鸞加点点『玄義分』の翻刻作業
 - ◇7月5日(金) 16時10分 (真総研ミーティングルーム)
親鸞加点点『玄義分』の翻刻作業
 - ◇7月12日(金) 16時10分 (真総研ミーティングルーム)
親鸞加点点『玄義分』の翻刻作業
 - ◇7月19日(金) 14時30分 (真総研ミーティングルーム)
親鸞加点点『玄義分』の翻刻作業
 - ◇8月2日(金) 16時 (真総研ミーティングルーム)
親鸞加点点『玄義分』の翻刻作業
 - ◇9月12日(木) 16時10分 (真総研ミーティングルーム)
親鸞加点点『玄義分』の翻刻作業
 - ◇9月27日(金) 16時10分 (真総研ミーティングルーム)
親鸞加点点『玄義分』の翻刻作業
- 《資料調査》
- ◇9月4日(水)・5日(木) (岐阜市 上宮寺)
観経疏および七祖聖教古版本・古写本の調査

国際真宗学研究

《翻訳検討会》

- ◇5月23日(木) 18時～19時30分(真総研)
- 《公開研究会》
- ◇6月13日(木) 10時40分～14時30分[第2会議室(講演)、第3会議室(ディスカッション)] 本多弘之氏
- 《公開講演会》
- ◇7月4日(木) 16時10分～17時40分(尋源講堂)
清沢満之とケルケゴール(ニューヨーク州立大学
助教授 Mark L. Blum 氏)

仏教・他宗教比較研究

《研究会》

- ◇4月24日(木) 5時45分(博綜館4F第二研 分室2)
今年度の研究方針について
- ◇5月8日(木) 5時45分(真総研ミーティングルーム)
『教行信証』の独訳
- ◇5月22日(木) 5時50分(真総研ミーティングルーム)
『教行信証』の独訳
- ◇6月12日(木) 5時50分(真総研ミーティングルーム)
『教行信証』の独訳
- ◇7月3日(木) 5時50分(真総研ミーティングルーム)
『教行信証』の独訳
- ◇7月10日(木) 6時40分(響流館3F演習室6)
『教行信証』の独訳
- ◇9月19日(木) 11時(真総研ミーティングルーム)
『教行信証』の独訳

西藏語文獻研究

《研究会》

- ◇4月25日(金) 16時10分(真総研ミーティングルーム)
今年度指定研究の活動打ち合わせ
- ◇7月16日(火) 14時(真総研ミーティングルーム)
前期研究活動の状況報告と今後の活動の打ち合わせ
- 《海外出張》
8月17日～8月23日(中国チベット自治区ラサの西藏
社会科学院)
今後の研究提携の打ち合わせのために、嘱託研究員
三宅伸一郎氏が西藏社会科学院を訪問し、所長を始め、
宗教研究関係のチベット人研究員と情報交換を行った。

パリー語文獻研究

《定例研究会》

- ◇4月16日(火) 17時40分(響流館4階会議室)
・今までの研究成果報告と今年度の研究予定

- ◇5月24日(金) 17時40分(東方研究会[東京])
・金漢益(東方研究会研究員)韓国の仏教事情の報告
・原田正美(大阪外国語大学非常勤講師)研究報告
・西昭嘉(愛知学院大学修士課程修了)研究報告
- ◇6月27日(木) 16時(響流館4階会議室)
・茨田道俊(東方研究会研究員)
「Dulakapandita-Jātaka について」
- ◇7月11日(木) 16時(響流館4階会議室)
・羽塚高照(本学博士後期課程)
「『那先比丘経』と Milindapañha の成立について」
- ◇9月26日(木) 16時(マルチメディア演習室)
・田辺和子(嘱託研究員)
「韓国における尼僧について」
・村西弘行(本学修士課程)、吉元信行(研究員)、
清水洋平(研究補助員)
「アンコール遺跡とチャンバ遺跡調査報告」
- 《特別研究会》
- ◇7月24日(水) 16時(真総研)
・畝部俊也(嘱託研究員)
ハーヴァード大学留学の現状報告

和漢文獻研究

《研究会》

- ◇5月22日(水) 16時10分(真総研ミーティングルーム)
今年度の研究計画に関する学内研究員による打ち
合わせ
- ◇5月29日(水) 17時(真総研ミーティングルーム)
研究課題に関するこれまでの取り組みについて
- ◇6月5日(水) 17時(真総研ミーティングルーム)
研究課題に関する今年度の研究方針について
- 《全体研究会》
- ◇6月26日(水) 13時(響流館マルチメディア演習室)
今年度の研究計画について
- ◇7月23日(火) 16時10分(響流館マルチメディア演習室)
研究の進捗状況について
- 《『仏教文献の調査と研究』班研究会》
- ◇6月7日(金) 18時(真総研)
昨年度より継続の研究成果の報告と今後の方針につ
いて
- ◇6月12日(水) 16時10分(真総研)
大蔵経学術用語研究会理事会の報告と本学の今後の
方針について
- ◇6月27日(木) 18時30分(真総研)
大蔵経学術用語研究会の研究テーマと本研究班の研
究課題について

- ◇7月11日(木) 18時(真総研)
大蔵経学術用語研究会の研究テーマに関する本学の
方針について
《大蔵経学術用語研究会理事会》
(出席者、キャップ木村宣彰)
- ◇6月10日(月) 13時(龍谷大学清和館3階会議室)
次期研究プロジェクトについて
- ◇7月19日(金) 10時(龍谷大学清和館3階会議室)
次期研究プロジェクトについて
- ◇9月29日(日) 16時(龍谷大学清和館3階会議室)
次期研究プロジェクトの進捗状況の報告と今後の課題

三友健容(立正大学教授)

Abhidharmadīpavibhāṣaprabhāvṛttiの研究並びに古代
「仏教文献の調査研究」

(指導教授 小川一乗教授、吉元信行教授)

[平成14年4月1日～平成16年3月31日]

大谷大学 FD 研究

《公開研究会》

- ◇6月11日(火) 18時(3103教室)
中村博幸(京都文教大学助教授)
「FDのさまざまな種類と考え方
—本学のFDの方向をさぐるヒントに—」
- ◇6月26日(水) 17時(1410教室)
中村博幸(京都文教大学助教授)
「基礎教育のためのリサーチ・スキル
—ブレインストーミングの模擬授業—」
- ◇7月12日(金) 18時(第3会議室)
崎野 隆教授
「授業者の方法に関する一試案
—大人数講義や少人数演習の事例研究—」
- 《第9回仏教・哲学系大学会議研修会意見発表》
- ◇9月20日(金) (東京都 ホテルメトロポリタン)
並木 治教授
「教授法開発(FD)のすすめ方」(教員部会)

大谷大学 DB 研究

《研究会》

- ◇6月28日(金) 17時50分～20時(3103教室)
片岡 裕研究員
「音声のデジタル化に関わる諸問題」

■人事(平成14年4月1日付)

研究所長 (新) 寺林 脩 (旧) 吉元信行
主 事 (新) 織田顕祐 (旧) 宮崎健司

■客員研究員

俞 咏梅(中国:東北師範大学文学院中文系教師)
「漢日言文字若干問題的比較研究」
(指導教授 河内昭円教授、李青助教授)
[平成14年4月1日～平成15年3月31日]

研 究 所 報 第 41 号

2002年10月31日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒603-8143 京都市北区小山上総町

Tel. 075-411-8161 Fax. 075-411-8162